第42章の Isabel Archer

—H. James研究—

出　原　博　明

I

THE PORTRAIT OF A LADY（1881）の第42章は，主人公イザベル・アーチャーの黙想の場面として夙に有名である。作者も，これを作中もっとも重要な二つの場面の一つとしてあげている。

これは，どのような構造をもち，どのような過程をたどっているのであろうか。又，それは，イザベルの何をあきらかにしているであろうか。

M. Proust の *À LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU*[1] の主人公の自己の意識の深奥への探索は，よく知られているように，お茶に溶かしたプチット・マドレーヌの唇への微妙な感触をきっかけとして始まる。では，イザベルの場合のそのきっかけは何であったか。

彼女が黙想に入っていく直接のきっかけとなっている出来事は，夫 Gilbert Osmond が彼女に，Lord Warburton に対する彼女の影響力を利用して彼が娘 Pansy に求婚するように仕向けるように，と遂に露骨に要請したことである。

マルセルのプチット・マドレーヌの刺激は，彼の遙か遠くの過去の時間と記憶をたぐり寄せる。他方，オズモンドの反倫理的な要請は，それまでイザベルの意識の中に蓄積されていながら未だはっきりとした形を取り得ていなかった諸々の感受の経験の破片を引き寄せてそれらに形を与えるに至るきっ

かけとなる。

しかし，イザベルの場合，答を得ることが出来ないまま彼女の意識の中に巣くっているこれらの諸々の破片をめぐる彼女の黙想は，ここにのみ始まった，と限ってしまうわけにはいかない消息がある。

ここでの沈思という行為へ彼女を駆り立てたと思われる主要なものの一つに，当日の昼間に彼女が偶然目撃した或る場面の記憶がある。その出来事の提示は，40章にまで遡る。そこで，彼女と義理娘パンジーは，ローマ郊外の野原の遊歩とローマの庭園の見物を楽しんだあと，一緒に帰宅する。パンジーは摘んできた花を活けるために自分の部屋へいき，イザベルはそのまま応接室へむかった。そして，応接室へ一歩踏み入れようとして，ある場面を目の当たりにして，はっとする。そこでは，Mme. Serena Merle が立っているのに，オズモンドはソファーに身を沈めたままの姿勢で，二人は互いに相手と視線を合わせていた。二人は，何かを話し合っていて，ふと今，言葉の接ぎ穂が途切れたところだ，という感じだった。

イザベルがオズモンドと知り合った時よりも前であることはもちろん，彼女がマダム・マールと知り合うことになるよりもずっと以前から二人が既に親しい間柄であった，という前提は，彼女の頭の中にマダム・マールによって叩き込まれていた。しかし，この時，マダム・マールから聞かされていたような親しい友人同士の間柄，ということでは説明しきれない何かを，イザベルは，その場面から感じ取ったのである。

その場面をイザベルに目撃されたことに気付いたオズモンドは，曖昧ないいわけを口にして座をはずす。後に残ったマダム・マールは，イザベルから，主人は貴方に座るように勧めなかったのか，といってその不自然さを指摘されると，少しあわてて，いや，私が帰ろうとしていたところだったからだ，と誤魔化しの答で弁解する。

夫と夫人が不注意にも露呈していたこの情景の不自然な印象は，その場では，はっきりとした形を取らずにイザベルの頭から消えた，ということになっている。しかし，それを目撃したことで，イザベルのマダム・マールに対す

る意識が，より鋭敏に，且つ，疑い深く，ならざるを得なかった，ということはいえよう。なぜなら，その直後のマダム・マールとの会話の応酬で，彼女は，相手の言葉の端々にまで鋭く反応して，相手が，“Do you know you' re a little dry ?”,[2] と非難していることでも判るとおり，マダム・マールがパンジーの結婚問題に介入してくることへの皮肉を込めて，辛辣な当てこすりを幾度も投げつけている。例えば，マダム・マールがパンジーの結婚問題から手を切ると言った口の下から，うっかり，なおそのことへの関心を示すと，“You don' t wash your hands then!”... “You can' t—you' re too much interested.”(168)，と，づけづけとそれを指摘してはばからない。

しかし，問題のイザベルの黙想は，マダム・マールが帰ってからすぐ始まるわけではない。その夜，ウオーバトン卿が訪ねてきて帰り，その後，オズモンドが部屋へ入ってきて，前記の答に窮するような無理な要求で彼女を追いつめておいて，去る，その時まで，彼女の黙想は，始まらないのである。

確かに，有名なこの黙想の開始に関しては，このとおりである。けれども，とはいっても，その黙想の場面を待つまでもなく，それまでに，何度も，彼女の心の内側が読者に判るように示されている。例えばそれは，その夜，オズモンドが応接室へ入ってくる少し前にウオーバトン卿がパンジーを訪ねてきたときの場面である。

ウオーバトン卿が応接間に座っている間に，イザベルはもう少しのところで，部屋を出て，パンジーとウオーバトン卿を二人だけにするという重大な一歩を踏み出そうとした。

On the evening I speak of, while Lord Warburton sat there, she had been on the point of taking the great step of going out of the room and leaving her companions alone. I say the great step, because it was in this light that Gilbert Osmond would have regarded it, and Isabel was trying as much as possible to take her husband' s view. She succeeded after a fashion, but she fell short of the point I mention. After all she

couldn't rise to it. Something held her and made this impossibe.... Pansy said nothing whatever about him [Sir Warburton] after he had gone, and Isabel studiously said nothing, as she had taken a vow of reserve until after he should have declared himself. He was a little longer in coming to this than might seem to accord with the description he had given Isabel of his feelings. Pansy went to bed, and Isabel had to admit that she could not now guess what her stepdaughter was thinking of. Her transparent little companion was for the moment not to be seen through. (177－178)

ここにも，イザベルの心の中でどういうことが進行しているかということを窺わせる手がかりのいくつかが示されているのである。それをもう少し具体的に言えば，イザベルは，ウオーバトン卿とパンジーを結婚させることについて夫に全面的に協力しようと考えているにも拘わらず，ここで，それを実行できるチャンスを得ながら，いざという段階となると，心に何か引っかかるものがあって，それが実行できなかった，ということになっている。

その方向へ彼女が一歩を踏み出すことにブレーキをかける何かがあるのだ。自分自身の内奥から，これはしてはいけないことだ，と囁きかけてくる声があるかのようである。

このきっかけとなったのは，皮肉なことに，ウオーバトン卿とパンジーを結びつけようとして躍起になっているオズモンドとマダム・マールの言動である。つまり，二人とも，彼女とウオーバトン卿の過去に触れて，現在もなお，彼女は，卿に対する影響力を持っている筈だ，とほのめかしたのである。

読者は，これまで辿ってきた過程から，彼女の良心に引っかかっているものが，ウオーバトン卿が愛しているのはパンジーではなくてイザベルではないか，又，パンジーが愛している相手もウオーバトン卿ではなくてロウジャーではないか，という疑念や，財産と社会的地位を目当てに娘を彼女が愛してもいないウオーバトン卿と結婚させるという夫の企みに加担することへの疚

しさ，パンジーの結婚に対するマダム・マールの異常な関心とお節介といったもの，などが複雑に絡まり合って，イザベルの行動の仕方に作用している，ということを容易に推察できる。そのために十分な情報を，それまでに，読者は与えられている。

Ⅱ

The Great Tradition の中で F. R. Leavis は，G. Eliot とジェイムズを比較して，後者が外側から語っている，と指摘して，内側から語っている前者を称揚している[3)]。リーヴィスは，それゆえにジェイムズのほうが浅いとでも言いたげである。

確かに，42章においてさえも，イザベルの内面は，外側から語られている，といえよう。しかし，小説芸術において，人間の内面を外側から語るということは，それほどマイナスであろうか。

ジェイムズの語り方は，語る，と言うよりは，暗示的に提示している，とでもいったほうがより適切かもしれない。

人物の内面を沼に例えるならば，ジェイムズはそれの底をひっかき回したりはしない。彼は，そこに沈んでいる木の枝や腐葉や泥を白日の中に引きずり出して，まことしやかに細かく分析したりはしない。彼は，おそろしいほどに鋭い目で，濁った水の底をすかし見る。そして，彼は，その鋭敏な視覚に写ったものを逐一，読者に示していく。見えている部分を，見えているとおりに誠実に示そうとしている。但し，何かに隠されていて見えない部分については，読者に，想像することを促している。実際には判るはずもないことを，まことしやかに露骨に断定しようとしたりはしない。判り得ないことは，そのままに暗示的に示すのである。

そして，ジェイムズの作品についてよく指摘される曖昧性を生じさせる要因の一つは，この姿勢と方法にもあるといえよう。

ジェイムズの後期に特に顕著になる人間意識の深層の探求への際だったター

ニング・ポイントとしても有名な，この作品の第42章についても，上記の特徴は当て嵌まる。

この章は，その殆どすべてが，イザベルの内面に起こっていることの提示で成り立っている。ここは，作品中で，彼女の内面が，具体的に，最も多く，読者に示された章である。しかし，その内容について細かく分析されているわけでも，それについて何らかのはっきりとした結論が出されているわけでもないのである。そこでは，彼女の意識の底からうたかたのように浮かんでは消えていくさまざまなおもいが，主として，イメージによって示されている。

以下，第42章の実際に即して，このことの検証を試みてみよう。

この章でイザベルの意識に浮かんでは消えていったイメージのなかで，研究者たちの注意を最も強く引きつけてきたのが，オズモンドのそれである。その中でも，とりわけ，It was as if he had had the evil eye; as if his presence were blight and his favour a misfortune. (188－189)，という，この男の悪魔的なイメージが焦点になりがちである。このイメージばかりを前面に押し出すことによってイザベルのほうには何の落ち度もなかった，と主張してやまない研究者もいるくらいである。しかし，この章を，もっと冷静によく読んでみるがいい。作者は，そんなに一方的に断定はしていないのではあるまいか。オズモンドは邪悪な存在にはちがいないのだが，同時に，彼の中に非難しきれない面もあることが示されていることも確かである。尤も，いうまでもなく，それに対する忌まわしいイメージの方が遙かに多いのではあるが。それらは，“the evil eye” のような彼の肉体の一部だけでなくて，彼の住居などのイメージによっても表わされる。

但し，42章においては，建物のイメージでも，他の章におけるようには，実際に触れうるものとして存在している建物を隠喩として用いているのではない。例えば，But when, as the months had elapsed, she [Isabel] had followed him [Osmond] further and he had led her into the mansion of his own habitation, then she had seen where she really was. (196)，と

あるが，この場合の住居は，名実ともに抽象的存在である。

又，She could live it over again, the incredulous terror with which she had taken the measure of her dwelling. Between those four walls she had lived ever since; they were to surround her for the rest of her life. (196) というイメージは，彼女の抽象的リアリテイーによって，彼女にとっての彼の存在のあり様を暗示している。

作者は，もちろん，他の章では，何度か，物理的に存在する建物の描写をとおしても，オズモンドの性格などを読者に伝えているが，第42章は，殆どすべてがイザベルの意識の中での出来事であるから，いきおい，抽象的な内容をイメージを使って比喩的に表現するか，想念をそのままの言葉で表現するか，のどちらかである。そして，今，彼女の目の前に物理的に存在しているものといえば，彼女が身を置いている応接間とそれの備品にすぎないのである。

彼女は，そこにある暖炉の火の前に座って，ひたすら黙想に耽っているのである。茲で彼女は，過去を振り返りながら，オズモンドの心の中を次々と読み取っていくのだ。そして，自分が如何に結婚の相手を見誤っていたか，ということの認識を深めていく。彼女の知覚がこれまで否応なく感受してきたあれこれの断片をつなぎ合わせていくと，結局は，オズモンドは，彼女が Mr. Daniel Touchett から貰った莫大な遺産を目当てに彼女と結婚した，ということになるのだった。尤も，それでも，彼女が知的で美しい娘である，という条件が付属していなかったならば，オズモンドは，その性格からいって、彼女を誘惑する労力を惜しんだかもしれないということが考えられるのだが。そして，このことは，これまでの経過を辿ってきた読者にも，十分判るようになっている。

彼女が，こんな筈ではなかった，と思い始めたのは，新婚の一年が過ぎた頃であるが，その時の状況は，次のようなイメージで表現されている。

Then the shadows had begun to gather; it was as if Osmond deliberately,

almost malignantly, had put the lights out one by one. The dusk at first was vague and thin, and she could still see her way in it. But it steadily deepened, and if now and again it had occasionally lifted there were certain corners of her prospect that were impenetrably black. These shadows were not an emanation from her own mind: she was very sure of that; she had done her best to be just and temperate, to see only the truth. They were a part, they were a kind of creation and consequence, of her husband's very presence. They were not his misdeeds, his turpitudes; she accused him of nothing—that is but of one thing, which was *not* a crime. (190)

Ⅲ

夫は何一つ悪いことをしたわけではないのだから，彼女は，夫を非難することもできない。だが，そういう状況の中でも，彼女が夫を非難せざるを得ない一点があって，それは，彼が彼女を憎んでいる，という事実であった。

このことからも想像がつくように，「こんな筈ではなかった」という状況は，相手がああしたこうしたとかということよりも，オズモンドとイザベルとの性格や考え方の相違から生じてきているのである。

イザベルの側からいえば，オズモンドという男が彼女が理解していた筈の人物とは異なる，むしろ，正反対とさえいえるような性格と思想をもった人物であることが，次第に判ってきたのである。彼女が彼を結婚の相手として適格とした，その判断の根拠となっていたものが，ここで，崩れたのである。

しかし，同時に，彼女は，オズモンドのほうもまた彼女が彼がおもっていたような人物ではない，ということに気付いて失望している，ということを知ってもいる。

この有名な黙想の中で，イザベルは，一方的に夫の非を糾弾するわけではない。自分の側の非も，認めるべきは認めている。それはどういうことかと

いえば，例えば，結婚前の交際時代に，彼女も，相手に，ありのままの自分を隠していた，ということである。

She had effaced herself when he first knew her; she had made herself small, pretending there was less of her than there really was. (191)

いうまでもなく，その期間は，オズモンドのほうも，並外れた魅力を力一杯発揮するようにつとめ，彼女はその魅力の虜になっていたのだった。

しかし，イザベルは，これを，彼がその時は仮面を付けていたのだ，とも，結婚後に彼の人柄が変わった，とも見做してはいない。ただ，その頃は，彼女は，彼の半面だけしか見ていなかったのである。

But she had seen only half his nature then, as one saw the disk of the moon when it was partly masked by the shadow of the earth. She saw the full moon now—she saw the whole man. She had kept still, as it were, so that he should have a free field, and yet in spite of this she had mistaken a part for the whole. (191)

彼女は，自分がオズモンドの魅力にとても惹かれ，彼に恋していた，ということも認めている。当時の彼女は，彼の，境遇にも心にも容貌にも，言いようのない美しさ，を見た。

A certain combination of features had touched her, and in them she had seen the most striking of figures. That he was poor and lonely and yet that somehow he was noble—that was what had interested her and seemed to give her her opportunity. There had been an indefinable beauty about him—in his situation, in his mind, in his face. She had felt at the same time that he was helpless and ineffectual, but the feeling had

taken the form of a tenderness which was the very flower of respect. He was like a sceptical voyager strolling on the beach while he waited for the tide, looking seaward yet not putting to sea. It was in all this she had found her occasion. She would launch his boat for him; she would be his providence; it would be a good thing to love him. And she had loved him, she had so anxiously and yet so ardently given herself—a good deal for what she found in him, but a good deal also for what she brought him and what might enrich the gift. (192)

そして，彼女は，タチェット氏が自分に遺してくれた莫大な遺産をオズモンドへの贈り物として，彼と結婚したのである。そこには，母性愛めいたものがあったようだ，と彼女は振り返っている。又，その莫大な遺産は彼女にとっては重荷であって，それを誰か自分よりも適切な受取人に譲りたいとばかり考えていたのだった。(193)

この皮肉な事情を，彼女に金がなかったらオズモンドは結婚しなかったというようなことだけではなくて，この金に対する義務感故に，彼女はそのような行動をとった，とする A. Berland の解釈もある[4]。

このように辿ってきてみると，イザベルが3人の求婚者の中から，ともに立派な条件を備えている優秀な青年を差し置いて，最も恵まれない状況に身を置いている，子持ちの中年男のオズモンドを選んだ理由として，母性愛というものを取り立てて強調する研究者も，大きな財力を何らかの形で使用しなければならないという，この時代には普通は男性が背負っていた，能動的な役割を果たさなければならなくなって，そういうことには慣れていない女性として，彼女は戸惑ってしまい，それを巧く処理する自信がなく，その役をオズモンドに転嫁した，と解釈する研究者も[5]，それぞれの推量の主な根拠を，ここでのイザベルの内省の内容に求めている，ともいえそうである。

ジェイムズは，創作ノートの中で，この物語の弱点は，外的な出来事に頼ることが少なくて，ひたすら心理ばかりを追究しすぎた，ということなのだ

が，イザベルの結婚が生み出した状況を完全に明らかにしていくことは，それは，もう充分に劇的である，と記している[6]。そして，確かに，結婚後の五つの章では，それまでイザベルが辿ってきた過程のすべてが集約されて劇的に展開している。又，ジェイムズは，ニューヨーク版の序文で，第42章を，外的事件ではなくて人間の劇的な内面を表すということをこの上なく巧く為しえたケースとして位置づけているのだが[7]，同時に，この章こそは，上記の結婚後の劇的展開の要にもなっているのである。

ここでは，結婚前のことも含めて夥しい数の要素が濃密に集約されている。そして，いよいよ決定的な展開，それまで絡み合いながら蓄積されてきたものの爆発，の時が迫っている，ということを予感させる。

ここで，彼女の黙想の中へ，過去と現在の時間の中から，経験の記憶が次々に呼び寄せられては検討を加えられているわけなのだが，それはのべつまくなしに，というのではなくて，やはり，そこには，或る方向性と選択がはたらいているのだ。その方向性と選択をはたらかせる電磁場を目覚めさせた，直接の刺激は何なのか。それはまだ，表面においては，はっきりと指し示されてはいないが，イザベルの経験の記憶をたぐり寄せる作用の，その中心に潜んでいる刺激物は，やはり，その日，応接間での，他者の目がないと信じて二人きりでいるときの夫とマダム・マールの有り様を垣間見て，直感的に「おや」とおもったあの経験であることは明らかであろう。それへの答が未だ具体的にははっきりとした形は取っていないこの疑念，によって，既に指摘したように，イザベルの知覚は，いっそう鋭くもなっているのである。

Ⅳ

第42章の中で，夜明けちかくの４時頃までの黙想を通して，彼女に「おや」と思わせたその問題の場面の記憶は，２度言及されている。

それの最初のほうは，黙想が始まって間もなく（２つ目のパラグラフ）である。

What had suddenly set them [terrors] into livelier motion she hardly knew, unless it were the strange impression she had received in the afternoon of her husband's being in more direct communication with Madame Merle than she suspected. That impression came back to her from time to time, and now she wondered it had never come before. (188)

それへの２度目の言及は，この章の最終に於てである。

When the clock struck four she got up; she was going to bed at last, for the lamp had long since gone out and the candles burned down to their sockets. But even when she stopped again in the middle of the room and stood there gazing at a remembered vision—that of her husband and Madame Merle unconsciously and familiarly associated. (205)

この２つの言及は，明らかに，偶然に目撃した問題の情景の印象の，イザベルの黙想への作用，を暗示してる。

一番目は，her soul was haunted with terrors，の原因として，the strange impression she had received in the afternoon of her husband's being in more direct communication with Madame Merle than she suspected，を考えている。又，前々章，つまり，第40章で，その場面を目撃した際にも，普通なら，There was nothing to shock in this; they were old friends in fact. である筈なのに，But thing made an image, lasting only a moment, like a sudden flicker of light. (165) という，いつにない現象を引き起こしている。

今の黙想の中でも，That impression came back to her from time to time, and now she wondered it had never come before. とあるように，以前と違って，そのような印象を受けさせるような素地が，最近のこの夫婦

の関係には出来上がってしまっていた，つまり，純真なイザベルの心にさえ，そういう場面を目撃した瞬間に，「おや」と，疑惑を生じさせるような，不幸な緊張が続いていた，ということを窺わせている。

そして，それは，表面には現れてはいないが，彼女の黙想を導いていく，という作用をしている。

この章の終わりにおけるそれへの２番目の言及によって，その伏水流は，表へ出てくる。

しかし，偶然目撃した場面が惹起した疑念がそれへのはっきりとした解答を得るのは，それからまた相当の日数が経ってからの，ジェミニ伯爵夫人の密告を待たなければならなかった。つまり，この疑念は，それまで，彼女の意識の闇の底に蹲って，彼女に微妙な作用を及ぼすことにとどまったのだ。

他方，42章の黙想の中でイザベルが直面している，もう一つの重要な疑念がある。この方の疑念は，既に，彼女の意識の表面に漂っている。つまり，それは，ウオーバトン卿が愛しているのは本当にパンジーだろうか，という疑念である。

確かに，ウオーバトン卿は，パンジーを愛していることを告白もし，今にも求婚しそうな気配を見せている。しかし，実際に卿が愛しているのは，パンジーの義母のイザベルのほうであり，パンジーとの結婚を望んでいるのは，そうすることによって，今なお彼が恋を断ち切れずにいるイザベルとつながりを持つことが出来るから，という動機がはたらいているからではないか。

黙想の中で，イザベルは，この疑念と直に取り組んでいる。そして，少なくとも彼女には，それへのはっきりとした解答は，まだ与えられてはいなかった。そもそも，この疑念の内容が指し示しているものは，彼女が考えてもみなかったことである。にもかかわらず彼女がこの疑念に捉えられたのは，マダム・マールとオズモンドから，次々に，その内容のこと（ウオーバトン卿とイザベルの過去，と後者が今もなお前者に影響力を持っているということ）をほのめかされたからなのだ。しかも，疑ってかかってみれば，彼女自身が直に見てきたウオーバトン卿の言動には，上記のほのめかしの内容を裏付け

るところがなきにしもあらず，であったのである。

既述のとおり，オズモンドとマダム・マールの両方が，彼女の影響力を利用してウオーバトン卿にパンジーに求婚させる，という大役を果たすことを，彼女に要求している。のちに，ずっと後の章に於いてであるが，マダム・マールの，次第にエスカレートする，度を超した不自然な介入に対しては，イザベルは，たまりかねて，「貴方は，いったい何者なの？」と，難詰するまでになる。が，他方，夫に対しては，その要求を理不尽だと思いながらも，最初から，少なくとも表面の意識では，出来る限り彼の意に添うように行動してあげよう，と考えている。

にもかかわらず，なおも，茲で彼女の前進にブレーキをかけるネックになっているのが，ウオーバトン卿のパンジーへの関心の根幹にあるのは，未だ消しきれずにいる，イザベルへの恋心ではないかどうか，という上記の問題に他ならないのである。仮に，ウオーバトン卿が無意識のうちにそうしていたとしても，イザベルの考えでは，それは，同じことであった。

そして，茲で注目すべきは，オズモンドとマダム・マールが，そういうウオーバトン卿の（無意識かもしれない）イザベルへの未練を，彼にパンジーに求婚させることに利用することに何ら良心の痛みを感じていないのに対して，イザベルの方は，それを強く感じて苦しんでいる，という事実である。

オズモンドとマダム・マールの関係についてもそうであるが，この場合のウオーバトン卿がパンジーに並々ならぬ好意を寄せるに際しての，本当の動機も，ウオーバトン卿を前にしての Ralph Touchett による指摘などをとおしても，既に読者には知らされている。そして，茲での黙想を通して，遂に，イザベルも，そのことを認識するに至る。それは，はっきりと明言まではされていないが，そこでは，数々の証拠が提示されて，彼女をそういう認識へと導いていった，ということが暗示されている。

例えば，これは既に言及したことでもあるが，第41章でウオーバトン卿がパンジーを訪ねてきたときの場面の記憶である。そこでは，イザベルは，何か心に引っかかるものがあって，その二人を二人っきりにするために席を外

すということをしなかった。すると，ウオーバトン卿は，彼の言葉どおりにパンジーを愛していて求婚したいのであればイザベルに席を外すように促すことだって出来た筈なのに，それをしなかった。パンジーのほうも，ウオーバトン卿が立ち去った後，何も言わずに，あっさりと自分の部屋へ引き上げてしまった。つまり，或る意味では，イザベルは，彼女を悩ましている謎を解くための手がかりの一つをここでやっと手に入れたとも言えるのである。

そして，第42章に続く章で，ダンス・パーテイーでウオーバトン卿に逢ったとき，イザベルは，表面では，夫の意に添うような言辞を弄しながらも，それとなくこちらの本音を相手に伝える，という行動をとっている。もう少し具体的に言えば，例えば，彼女は，相手の言動の中の，パンジーを本当に愛しているにしては不自然な点を指摘することによって，それが心底からのものではない，ということをウオーバトン卿自身に悟らせている。

この黙想の場面では，上記の問題とも絡めて，イザベルとオズモンドの根本的な対立点が浮き彫りにされている。

ジェイムズは，『創作ノート』の中でも，この両者の本性の相違，ということに言及している[8)]。

V

プルーストのプチット・マドレーヌとイザベルの黙想のきっかけとなったものとを比較すると，先ず，後者は，前者に比して，人間の生の営みにおける痛ましい棘のようなものを内蔵している。

イザベルの場合の二つの刺激のうちの一つは，彼女の夫と彼女が尊敬してきた女性との間のおぞましい関係を窺わせる場面であり，もう一つは，彼女に拒絶されたことのある，かつての求婚者の，彼女への断ち切れぬ未練を動機としているかも知れない，彼女の義理の娘への求愛行為である。どちらの出来事にも，人間の深い闇が覗いている。

これに対してマルセルのプチット・マドレーヌの感触は，少なくとも，意

識の奥への旅のきっかけとなる刺激としては，軽やかで快いものである。尤も，そこから始まって延々と意識の中から引き出される世界の内容は，痛ましいことにも事欠かないのだが。それはさておき，マルセルは，プチット・マドレーヌの感触が触発しているものが何であるか，を発見するまでに，相当の言葉とページ数を費やしている。

しかし，イザベルの場合は，それよりも遙かに多くの時間と紆余曲折を経てから，やっと，前記の二つの刺激に隠されていた意味を発見するのである。しかも，彼女による発見を待つまでもなく，そこに隠されているものは，物語のそれまでのプロセスをとおして，常識を備えた読者には判る，という仕組みになっている。のみならず，それまで読者に与えられてきた情報は持っていなくて，イザベルの立場に置かれたものであっても，その方面の常識が豊かでさえあれば，その人には，それの意味が判ってしまうのではないか，という消息がそこにはあるのである。

にもかかわらず，イザベルには，それが，なかなか発見できない。何か匂いのようなものは感じているようではあるが，自分の想像力が十分には働いてくれず，いつまでも，迷路の中をさまよっているようである。

男と女のその道の経験と知識の豊富な Countess A. O. Gemini などは，兄であるオズモンドとマダム・マールとの関係を，イザベルにばらした後，“In your place I should have guessed it ages ago. Have you never really suspected ?”(362) と，半ばは，あきれ顔である。

“I've guessed nothing. What should I have suspected ? I don't know what you mean.” と，イザベルが答えると，“That's because you've such a beastly pure mind. I never saw a woman with such a pure mind !” と，ジェミニ伯爵夫人は，叫んだのだった。

イザベルは，確かに，見ている方が歯がゆくなるほどに，悪というものに気付くのに手間取る。そして，このイザベルの，常軌を逸しているとさえ言えそうな手間取りにこそ，このヒロインの本質，ひいてはこの作品の意味，を解くための鍵が隠されているのではあるまいか。

ところで，この作品を，世間知らずのひとりの若い女性が，人生経験を経て次第に成長していく，という教養小説として読むということは，ふるくから行われてきている。そして，この作品が，そういう，若い女性の成長を描いたものである，ということは揺るぎない事実である。

然し，同時に，ここでは，その成長とともに，彼女の資質の問題が検討を要求しているのではないか。

イザベルについてのこれまでの諸研究に私がこの小論で付け加えようとしているのも，まさに，そのことの解明である。そして，それは，これまでにも，繰り返し言及してきた，悪を発見するまでの彼女の手間取り，ということと大いに関係があるのである。それは又，とにかく，42章における彼女の黙想，心のはたらかせ具合，と密接につながっているのである。

偶然垣間見た，夫オズモンドとマダム・マールとの場面，の不自然な印象の記憶が，彼女の心をさいなんだ。彼女は，その場面に何か不自然なものがあるのを感じることは出来た。けれども，彼女には，その後も長い間，それが，具体的には，何なのかは判らなかった。最終的には，上記のジェミニ伯爵夫人にそれを密告されるまで，彼女は，それを知ることが出来なかった。のみならず，それを知ったときも，伯爵夫人の予想に反して，彼女は，顕に取り乱すということはしなかった。

42章の夜を徹しての黙想にしても，例の場面の目撃の印象そのものが直に彼女をそこへ導いたのではなかった。既述のとおり，夫から，ウオーバトン卿に対するイザベルの影響力にものをいわせて，彼がパンジーに求婚するよう誘導せよ，と強要されて追いつめられたが故に，それが直接のきっかけとなって，彼女はこの有名な黙想を始めることになったのである。そして，その黙想の中で自分の心の軌跡を辿っていくうちに，意識の底に例の場面の目撃の印象が潜んでいて，それがこの黙想に微妙に作用しているということに気付いたのである。

何故，あの時，彼女は，はっとしたのか。それは，かつては彼女が尊敬していたマダム・マールの行動の仕方に触発されて生じた漠然とした疑念が彼

女の意識に巣くうようになっていたこととも無縁でない筈である。

その行為とは，具体的にはどういうことかと言えば，最近のマダム・マールが，ことパンジーの結婚問題となると，異常に強い関心を示し，出しゃばった行動をとろうとした，ということである。

イザベルは，当然，そのことを不審に思った。マダム・マールっていったい何者なのかしら，という疑念を抱いた。然し，彼女の想像力は，そこから先へは踏み込むことが出来なかったのである。このことは，既に若干は言及したとおり，彼女のもって生まれた資質そのものと大いに関係があるのである。

人は，自分の内面に無いものは，なかなか想像できない。つまり，これが若し，彼女の状況に身を置いているのがジェミニ伯爵夫人のような女であったなら，いとも簡単に，オズモンドとマダム・マールの関係を見破ったであろう。又，ウオーバトン卿の彼女への恋心が彼女の結婚後にも消えていないことや，それ故にパンジーに近づいている，ということも，自分で見抜けたであろう。

ジェイムズが，親交のあったI. S. Turgenevから，創作方法における登場人物の性格についての考えを取り入れた，ということは有名であるが[9]，ニューヨーク版のこの作品に彼が付けた序文でも，如何にイザベル・アーチャーの性格設定を優先させてそれに注意を注いだか，ということが語られている[10]。そして，彼の考えでは，運命に敢然と立ち向かっていく，この知的な若い女性こそが，作品のコーナー・ストーンであった。

実際の作品においては，イザベルの性格は，早くも，1章で紹介されるMrs. Lidia Touchettの電文の中で，と2章の冒頭に登場してからのそこでの行動の仕方や会話を通して，既に，具体的に示されている。例えば，ガーデンコートの午後のテイー・タイムの場面への，きわめて率直で物怖じしない登場の仕方。真っ先に彼女に吠えたてたテリア犬の扱いやその犬をめぐってのラルフとのやりとり。ラルフに促されるまでは，この屋敷の主であるダニエル・タチェット氏のところへ自分の方からすすんで挨拶にいこうとしな

かったこと。そこで，タチェット氏，ラルフ，ウオーバトン卿たちと会話を交わしている間にも顕にする，ロマンチックなものへの彼女の好奇心。ラルフに画廊の案内を求め，今日は疲れているから次の日にしよう，というラルフの配慮をどうしても聞き入れようとせず，我を通したこと。或る夜，9時過ぎてもウオーバトン卿とラルフという二人の男性と一緒に，お付きの者なしで，部屋に残ろうとして，タチェット夫人に叱られる羽目になったこと。又，少し後に，ウオーバトン卿の邸宅での彼の二人の妹との対面の場面は，そのコントラストをもって彼女の性格を一層際だたせるものであった。

イザベルの性格は，勝ち気で独立心の強い自信家であり，我を張って人の言うことを聞こうとしないところがある。又，ロマンチックな夢想家の傾向を持っていて，実際的な常識には欠けるところがある。

その後の彼女の行動の仕方は，主に上記のような性格によって導かれ操られることになる。マダム・マールに惹かれ，普通の常識では願ってもない申し出といえそうな，ウオーバトン卿と Caspar Goodwood という優れた二人の青年からの求婚を退けて，他者の忠告には一切耳を貸そうとせず，独断で，一介の怠け者のデイレッタントにすぎない，子持ちの中年の寡夫，ギルバート・オズモンド，と結婚してしまう，という彼女の辿った行動の軌跡には，これらの性格が深く関わっているのである。

Kenneth Graham は，ヒロインたちが二者択一を迫られ，それぞれの性格にしたがって選択を行い，その結果を引き受ける，というヴィクトリア朝小説の一傾向を指摘して，イザベル・アーチャーもそれらのヒロインたちの系譜に属する，という見方をしているが[11]，確かに，イザベルは，自己の選択が招いた悲惨な結果を運命として，それと正面きって取り組んでいる。

然し，ここで，私が特に注意を喚起しようとしているのは，そのこと自体ではなくて，既に言及したとおり，そのつらい状況に直面することによって顕に姿を現すことになった彼女の資質，についてである。

では，その資質とは，具体的にはどのようなものであるか。

それは，先に，42章の黙想に至る過程を分析しながら何度か言及した，当

然証拠となるべき行為や状況を目の当たりにしているにも拘わらず，オズモンドとマダム・マールの不倫の関係にも，彼らの利益のためにイザベルを餌食にしたという彼らの企みにも，ウオーバトン卿のパンジーへの接近の裏には未だ消せずにいるイザベルへの恋心があるということにも，彼女がなかなか気付くことができないということと密接につながっているものである。つまり，それは，悪というものの伝わりにくい彼女自身の資質に他ならない。

問題の42章の黙想が明らかにしているのは，イザベルの資質が悪に気付きにくいものであるということだけではない。結婚後の或る時点から彼女を脅かすようになって次第にその度合いを増してきたオズモンドの数々の仕打ちを羅列しながらも，彼女は，自分自身にも一度ならず反省の目を向けている。相手の言動のあり様を“the evil eye”というイメージに凝縮させながらも，決して一方的に非難するということはしなかった。特に恋愛時代へ思いを馳せるときの彼女の内面のモノローグには，オズモンドへの恋と愛情と優しさがあふれていて，現在の彼女の心の底のどこかにその頃の気持がまだ微かに揺曳しているらしい，とさえ想像させるところがある。彼女は，かつては，それほど迄に，彼の魅力の虜になっていたのである。

この黙想の段階で，既に，彼女には，オズモンドの彼女との結婚の主な動機が彼女の莫大な財産目当てだった，ということが判っていた。にもかかわらず，彼女は，オズモンドが今の態度を改めさえしてくれたらよいのに，という願望を秘めてもいることを窺わせる。ぎくしゃくしている二人の関係を修復することができるものならば，それで，彼女は，オズモンドとの夫婦生活を続けていきたいのである。

彼女のこの姿勢には，たとえそれが悲惨なものであっても自分の選択の結果は受け入れる，という，既に言及した，ヴィクトリア朝期のヒロインたちの行動のパターンと呼応するところがあるといえようが，同時に，イザベルが，彼女の選択の不幸な結果をラルフやウオーバトン卿やグッドウッドなどの他者には必死に隠そうとしているところからも想像がつくように，そこには，彼女のプライドというものが大きく作用しているのである。

然し，私は，ここで，それらの中心に次のような原因が潜んでいるのではないか，ということを付け加えておきたい。つまり，それは，これまでにも何度か言及してきた，彼女のもって生まれた資質の問題である。もっと具体的に言うならば，それは，悪というものに同化することが出来ないのはもちろんであるが，それ以前に，悪というものを十分には理解することの出来ない資質である。この資質故に，それまでにオズモンドとマダム・マールの悪行の状況証拠を十二分に得ているのに，追いつめられた状況で丸一晩中黙想したのに，なお，彼女は，彼らの悪の実体に思い至ることが出来なかったのである。

更に，この有名な黙想の場面で注目すべきは，既述のとおり，オズモンドの恐ろしいイメージが何度も彼女の黙想の中に登場するが，この場合のイメージというものが，まだ未分化の存在で，多くの場合，無意識の領域からの来訪者だ，という興味深い現象である。

他方，黙想の中の思考の関わる部分では，イザベルは，上記のイメージの恐ろしさを，むしろ，薄めようとしている。例えば，恋愛中に自分の中の相手に気に入られそうなところばかりを見せたことなどを反省するばかりか，相手の立場に立って弁護してあげようとさえしていること。恋愛中のオズモンド，と結婚後二人の間に亀裂が入るまでのオズモンド，がどんなに魅力的で素晴らしかったか，ということにも何度も言及している。既に少し触れたが，まるで，今も，彼への未練にとらわれているかのようでさえある。

彼女の無意識の領域から浮かんでくるオズモンドのイメージは恐ろしいものだが，それに対する彼女の意識の活動は，一応，非難はするものの，そこには，かくのごとく，むしろ，優しさと善意が見られる。

この意識の活動こそ，彼女のもって生まれた資質の作用によるものである。そして，それは，例えば，*What Maisie Knew*[12] のメイジーが如何なる堕落と悪の中に投げ込まれ揉まれても，究極的には，それに染まることがなかった，或いは，それに染まることが出来なかったように，悪というものとは決して混じり合うことのない無垢，としか言いようのない資質である。

これはまた，正当な理由もなくタチェット氏から受け取ることになった莫大な遺産を，（誰かからこのような莫大な遺産を貰うこと自体を倫理的に美しいことではないと感じて）利己的なものではなくて，何か崇高な美しい行為のために捧げようとした彼女の美意識とも通底するものである。又，義理の娘に社会的地位と財産を獲得させるために，ウオーバトン卿のイザベルへの断ち切れぬ未練を利用することを，間違っている，と感じる彼女の美意識とも。

注

1）M. Proust (1871－1922) によって，14年 (1913－27) の歳月を費やして書かれた，20世紀フランス心理小説の金字塔。20世紀文学に多大の影響を与えた。

2）H. James, *The Portrait of a Lady*, The New York Edition of Henry James, Vols. 4 (NY: Charles Scribner's Sons, 1908, New Jersey: Augustus M. Kelley, 1977, Reissued) 167.

以下，当論文中の，テキストからの引用は，全て，この版のテキストからのものであり，引用部分末尾の括弧内の数字は，それのページを示す。

3）F. R. Leavis, *The Great Tradition* (London: Chatto & Windus, 1948) 109－111.

4）A. Berland, *Culture and Conduct in the Novels of Henry James* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981) 119.

5）Millicent Bell, *Meaning in Henry James* (Massachusetts: Harvard University Press, 1991) 104.

6）F. O. Matthiessen and Kenneth B. Burdock(ed.), *The Notebooks of Henry James* (New York: Oxford University Press, 1947)15.

7）H. James, *The Art of the Novel* (New York: Charles Scribner's Sons, 1909) 57.

8）*The Notebooks of Henry James*, 15.

9）*The Art of the Novel*, 42－43.

10）Ibid., 48.

11）Kenneth Graham, *Henry James* (London:Macmillan Press, 1955)58－59.

12）1897年発表の H. James の作品。彼の，口述筆記による最初の小説。大人たちの倫理的に腐敗した生活の真っただ中に投げ込まれながらも，ついに，それに染まることなく，the moral sense を失わなかった少女の物語。

ISABEL ARCHER IN CHAPTER XLII
—A Study of H. James—

Hiroaki DEHARA

The statement of Isabel Archer's extraordinary meditative vigil in Chapter XLII of *THE PORTRAIT OF A LADY* is one of the two most important representations, as H. James pointed out in his preface to this work of New York Edition. The technique applied here is said to have been developed into that of his so-called major phase masterpieces.

The aim of this paper is to examine and clarify what of Isabel Archer, heroine, has been revealed through this famous meditative vigil scene.

One day G. Osmond, her husband, demanded Isabel to make use of her assumed influence over Lord Warburton to decoy him into proposing to Pansy Osmond, her stepdaughter. As soon as her husband left the room after ordering her to act on his demand, she started to meditate.

A scene comes to her mind during her vigil, which is the one she came upon unexpectedly on coming home from her outing to the Campagna with Pansy this afternoon.

Just beyond the threshold of the drawing room she stopped short, and glimpsed the scene of her husband and Mme. Merle alone together. The former was leaning back in a deep chair while the latter was standing on the rug, which gave the eyewitness a strange impression. They were looking at each other without talking. There was a silence of anomalous familiarity between them. Mme Merle noticed Isabel

first. Her husband instantly jumped up, and left the room making a poor excuse of wanting to take a walk. Mme Merle remained and explained that Osmond did not ask her to sit down because she was on the point of going away. After this, she asked Isabel to arrange matters for Lord Warburton to propose to Pansy, referring to her influence over him, which made Isabel feel unpleasant.

The strange impression of the scene seemed to have gone out of her mind in a moment then. However, it comes to her twice during the meditation and affects it. The memory of the scene she glimpsed remains deep in her consciousness like hidden water under the ground and surfaces occasionally. However, her whole night meditation does not find the meaning of the scene for her. It remains as a puzzle for her till the time when Countess Gemini tells her that Osmond and Mme Merle committed adultery and Pansy is their daughter, not Mr. and the late Mrs. Osmond's. This divulgence took place more than a month after Isabel's vigil. That is, Isabel could not have found it for herself without Countess Gemini's help.

Another puzzle she faces in her vigil is whether Lord Warburton still loves Isabel and it has something to do with his approach to her stepdaughter. What is important here is that she never susupected it till someone else suggested it to her. In her meditation she adimits the possibility. Probably Lord Warburton is approaching Pansy without being conscious of the true motive, but the result means the same to Isabel.

Knowing this, she guides Lord Warburton to draw away from her stepdaughter. She carries out this without any direct expression. While she behaves apparently as if she were obeying her husband, she leads Lord Warburton to become aware of his true motive only by pointing

out a few of his deeds which contradict his confessed love toward Pansy. As a result he becomes aware of his hidden desire. He also finds out that Pansy's prospective choice is not he but Rosier.

Consequently, he goes back to England, which angers Osmond and Mme Merle. Both of them suspect that Isabel betrayed them.

During the vigil, quite a few things come to her which she has experienced before and after her marriage with Osmond. Most of them show how she has anguished since after their honeymoon period was over. Now her mind is haunted by terrible images which are assumed to represent Osmond's true self. The worst of them is "the evil eye". Another image is that of Osmond mocking cold-heartedly, from a small high window, at her while she is confined in the house of suffocation. The image of Osmond as a votary of the worldly vanity is also quite contrary to the one she had held before their marriage.

Undeniably Osmond has married her for her money. Now he is rancorous toward her.

In spite of these terrible images, Isabel is far from criticizing him one-sidedly to her own advantages:she occasionally even tries to defend her husband and take some of the responsibilities to her, admitting her own faults.

The ways she thinks and acts tell what her character is.

She is too innocent to notice evil. She is too innocent to be infiltrated by evil. She cannot commit evil. Her nature is quite different from those of Osmond and Mme Merle.